

## 阪神・淡路大震災を経験して

織田浴接株式会社 代表取締役  
(淡路市消防団副団長)

織田 崇史



阪神・淡路大震災から30年が経過しましたが、今でも当時の事を鮮明に覚えています。

私は消防団に入団してまだ5年ほどだったと思います、突然の激しい揺れと共に家具や電気製品が部屋中を飛び回って、横で寝ていた当時4歳の長女の上にかぶさり、揺れが収まるのを待ちました。

幸い家族は無事でしたので、外が明るくなるのを待って車で外の状況を確認に行きました。倒壊している家で住民が下敷きになっていると聞き、消防団の仲間と救出しましたが、もう亡くなっていました。

その後、隣の地区で倒壊家屋が多数あるとのことで指示された場所に駆け付けると、1人の女性が「この下です、何人かの方が瓦礫をどけてくれています、もうダメみたいです」と私達に話されました、瓦礫に埋まっているのはその人の子供で小学2年生とのことでした。そのお母さんの顔が涙でぐしゃぐしゃになって、両手をあわせてしゃがんでいる姿を見たとき、私も涙が出てきて法被で涙をぬぐいながら瓦礫をどけたことを今でも鮮明に覚えています。

その後も住民と協力して生き埋めになっている人を救出しました。当時の北淡町は隣近所の繋がりが深く、この家の人はこのあたりで寝ているなどの情報を住民の方から聞いてピンポイントで救出できました。そして当日の午後5時には行方不明者0人を確認できました。

翌日からは各避難所に配置され避難者の世話や救援物資の配給の手伝いをしました。

避難所では最初は特にトラブルはな



かったのですが、避難生活が長くなると次第に不平や不満が大きくなり、もめ事が起こるようになりました。避難者は消防団には協力的に接してくれるのですが、行政の方に対しては文句を言っていたように思います。

消防団として活動したのは地震発生から2週間でした。時間が空けば分団の人たちと交代で自宅に戻りました。

電気は翌日には復旧しましたが、水道は5日間使えませんでした。

妻は4歳と0歳の娘を見ながら倒れた家具や粉々になった食器などを片付けていました。

運が悪いことに長女がインフルエンザにかかり39度の熱を出しました。私は出動していたので妻は大変だったと思います。

今でも消防団活動の際には家族の協力があってこそなんだと思っています。

地震が起こるまでの私は、お世辞にも真面目な消防団員ではありませんでした。

田舎ですので、家の長男で成人すると消防団に入るのが当たり前ということで入団しましたが、会合もさぼりがちだったと思います。

そんな私が震災に直面した時、自分たちの無力さを痛感したのです。地震という災害に対して知識がないため活動の優先順位がわからず、携帯電話もない時代だったため情報も入ってこない、目の前には倒壊した家と、悲しみと恐怖に泣く人々、手探りで活動しましたが、この時、消防団の大切さ、訓練の大切さを強く感じました。

阪神・淡路大震災をきっかけにボランティアに関心もたれ、消防、警察、自衛隊も活動の基準を見直し、街づくりや建築基準も大きく変わりました。

私たちも災害に対して関心を持ち、家族や知り合いの人と、もし地震が起こったらどうするべきか、どうすれば自分を守れるか、どこに避難すればいいかを話し合ってください。

地震が起こった時、子供が自分のそばにいるとは限りません、日頃から地震が起こった事を

想定して家族で共有することによって少しでも災害の危険から身を守ることが出来ると思います。

災害は無くす事は出来ないけれど、日頃の備えや知識を得ることで被害は少なくすることが出来ると思います。

そして、私たち消防団も消防署、警察、自衛隊、地域防災と連携して災害に強い街づくりの為に精進してゆこうと思います。

